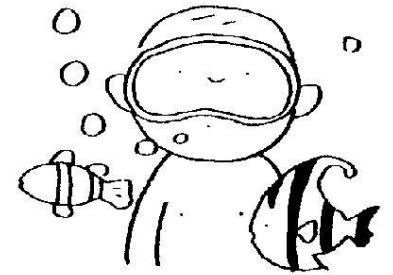


悲しい昔話④

今でこそ、どこの小学校にもプールがありますが、私の時代はありませんでした。したがって、小学校での水泳指導もありませんでした。そのせいか私は5年生まで泳げませんでした。夏休みは子どもたちにとって水遊びが何よりの楽しみです。当時は今と比べて川の水は豊富できれいでした。村の上流には砂防ダムがあって真夏にはかんがい用の水が貯められていました。

村のリーダーは中学生でした。子どもたち10人ぐらいでこの砂防ダムで水遊びをしていた時に、私がおぼれました。砂防ダムですので突然深くなっているところに足をとられたようです。後で思い出すのですが、人間おぼれた時には目を開いているようです。なぜなら、その時自分の吐いたあわぶくがはっきり見えたのを覚えているからです。そしてたぶん、無意識に手は万歳をするようです。私を助けたリーダーの中学生は「水面にお前の両手だけが出ているのでおぼれているのがわかった」と淡々と言いました。その次の日に同じ仲間と砂防ダムに行って犬かきができるようになったのです。5年生の夏休みでした。



私を助けてくれた中学生は今でも村の祭りのリーダーです。彼の顔を見れば時々私は思い出しますが、口に出してしまえば借りがあることを思い出させてしまいそうで大人になってからはいっさい言いません。でも恩義は内心いつも感じています。今私があるのはあなたのお陰です。ありがとうございます。

もちろん、その事件は親には言っていない。なぜでしょう。言えば次の日に行くことを許してもらえなくなるし、泳げるようになる機会や友だちとのつながりを失いたくなかったからでしょう。おそらく…。

言っておきますが今の時代にあてはめてはいけませんよ。大昔の個人的回顧録ですから。